

〇-5) 著明な cortical venous reflux を伴った海綿静脈洞部硬膜動静脈シャントの3例

江面 正幸・高橋 明 (広南病院血管内)
 藤井 康伸 (脳神経外科)
 吉本 高志 (東北大学脳研)
 (脳神経外科)

今回我々は、著明な cortical venous reflux を呈し、SPECT にて脳血流低下が確認された海綿静脈洞部硬膜動静脈シャント (CSdAVS) を3例経験したので報告する。

症例1は59歳女性、症例2は49歳男性、症例3は69歳女性、いずれの症例も複視・結膜充血などの眼症状を呈したが、その程度は軽微だった。症例1ではIPS、症例2ではSOV、症例3ではIPSが副次的な drainage として認められたが、いずれも main drainage はシルビウス静脈への cortical venous reflux であり、SPECT では reflux がみられる部分の血流低下が確認された。症例1・症例2では経静脈的塞栓術を施行、治療後眼症状は徐々に改善していき、SPECT 所見は正常化した。症例3も経静脈的塞栓術を予定している。

Cortical venous reflux を伴う CSdAVS では、これが顕著な場合には頭蓋内出血の危険性が高いため早期の治療が必要と考えられる。この際眼症状と臨床的切迫度とは相関しないので、治療の緊急性を判定するには、SPECT による脳血流イメージが有用と思われた。

〇-6) 巨大 venous pouch を伴った脳内 AVF の1例

池田 修二・桑山 直也
 野村 耕章・西嶋美知春 (富山医科薬科大学)
 遠藤 俊郎・高久 晃 (脳神経外科)

出血で発症し、巨大な venous pouch を伴った脳内動静脈瘻 (AVF) を経験したので報告する。【症例】42歳、男性。【主訴】突然の頭痛。【既往歴、家族歴】特記事項なし。【現症】平成5年12月14日、突然の頭痛を主訴に近医を受診した結果、脳室内出血と診断され、翌日当院に紹介入院した。【入院時所見】入院時意識は清明で、左同名半盲認めた。CT 上、右頭頂葉の一部器質化された多発性の占拠病変を認め、血管撮影にて右中大脳動脈 (MCA) および右後大脳動脈 (PCA) の皮質より巨大な venous pouch に流入する AVF と診断した。【経過】PCA からの流入動脈は血管内治療より polyvinyl acetate (D) を用いて完全に閉塞した。MCA からの流

入動脈は開頭により、術中血管撮影下にクリナップした。術後、新たな神経脱落症状は出現しなかった。追跡血管写にて MCA の流入動脈近位から側副路を介した血流が一部残存し、経過観察中である。

〇-7) クモ膜下出血にて発症した intradural true ophthalmic aneurysm の1例

染矢 滋・南出 尚人 (水見市民病院)
 村松 直樹 (脳神経外科)
 池田 清延 (金沢大学)
 (脳神経外科)

IC-ophthalmic aneurysm は、内頸動脈の眼動脈分岐より後交通動脈分岐部までのいわゆる ophthalmic segment に発生する動脈瘤である。今回、我々は、クモ膜下出血にて発症した眼動脈自体より発生した true ophthalmic aneurysm (以下 True OP AN) を経験したので報告する。

症例は69才男性。突然の頭痛、嘔吐あり救急車にて当科へ搬入された。頭部 CT にてクモ膜下出血を認め、脳血管撮影にて右眼動脈に内頸動脈より分岐後 6mm 末梢に直径 5mm の動脈瘤を認めた。Rt-cranio-orbital approach により動脈瘤クリッピングを行った。

True OP AN の報告は数例をみるのみできわめて稀である。Intra orbital ophthalmic aneurysm とは異なりクモ膜下出血にて発症する。硬膜外からの前床突起の削除と視束管開放がクリッピングに際し有用であった。

〇-8) 内頸動脈閉塞術後12年を経過して発生し破裂した同側 true posterior communicating artery aneurysm の1例

小笠原邦昭・沼上 佳寛 (石巻赤十字病院)
 関 薫・北原 正和 (脳神経外科)

脳主幹動脈閉塞後、閉塞血管領域の血流を補うため他の脳動脈に側副血行路として hemodynamic stress が加わる。こうした hemodynamic stress は脳動脈瘤の成因となりうるということが知られている。今回我々は頸部内頸動脈閉塞術後12年目に発生し破裂した true posterior communicating artery aneurysm の1手術例を経験したので報告する。症例は45才の女性。28才の時破裂前交通動脈瘤に対し根治術を受けたが、この時併存した右内頸動脈瘤に対し muscle wrapping が行われた。33才時この右内頸動脈瘤が破裂したため右頸部内頸動脈閉塞術及び右 STA-MCA 吻合術が行われた。今回は突然